

以玉帶施元長老 元以衲裙相報 次韻二首 其一

玉帶を以て元長老に施す 元は衲裙を以て相報いらる

東坡は便服で仏印の方丈に入った。

仏印：「内翰何れより来れる。この間に坐榻なし」

東坡：「暫く和尚の四大を借りて禅牀となさん」

仏印：「山僧に転語あり。言下に即答せばまさに請ふ所に従ふべし。もし、や擬議に涉らば、繫ぶ所の玉帶、願はくは留めて以て山門を鎮めよ」

東坡は玉帶を解いて机上に置いた。

仏印：「山僧の四大もと空、五蘊は有に非ず。何処に坐せんと欲す」

東坡が即答できないでいると、仏印は侍者を呼んで玉帶を収めさせた。かくて東坡は玉帶を元長老、仏印禪師に施捨した。すると元長老は衲裙をとり出して返礼とされた。長老は絶句二首をつけて東坡に示した。

その長老の詩に次韻した二首の第一首がこの作。

病骨難堪玉帶圍

病骨堪へ難し玉帶の囲むに

鈍根仍落箭鋒機

鈍根 仍ほ落つ 箭鋒機

欲教乞食歌姬院

食を歌姫の院に乞は教めんと欲し

故與雲山舊衲衣

故に与ふ 雲山の 旧衲衣

【語釈】元豊七年八月（一〇八四）49歳、潤州に留まり、金山寺の仏印禪師の方丈を訪ねて作る。○玉帶：玉の飾りのついた帯。高官のものが用いる。○施：セは呉音。恵む、与える。○元長老：仏印禪師（一〇三二〜九八）、名は了元、字は覚老。高德の僧として名は朝廷に聞こえ、神宗から賜りものもあつた。東坡が黄州に謫されていたころは廬山におり、このとき金山にいた。東坡との交友久しく【東坡仏印問答】という本もある。○報：返礼をする。○衲裙：僧侶の衣の下裳。○便服：東坡は仏印に対し「つねに法衣を搭して修道」したという（正法眼蔵九谿声山色）○内翰：翰林学士の称、東坡をさす。○この間：

方丈にはあなたにお坐りいただく処がない。○四大：からだ。禅門で四大不調という語が用いられる。○転語：機宜に従い辞鋒を変転する禅家の語。○五蘊：色・受・相・行・識。○鈍根：根は機根、根機、さとりをひらくべき心。○仍落：仍は仍然。鈍根であることによって落ちることになったと、いうきもちと考える。○箭鋒機：箭は矢、鋒はきつさき。禅家で機鋒と云って、禅を談ずるとき言辞のきつさきの鋭いのをいう。また「箭鋒相遇ふ」といい、師と弟子の機々相投合する意に用いられる。射を学んだ紀昌が、その師の飛衛を射殺そうとするが、二人の放った矢は「矢鋒相触れて地に墜ちた」（列子の湯問篇）。○欲教：五燈会元に引かれたこの詩では、会当（かならずまさに：べし）となっている。○乞食：托鉢。僧がはちをもつて家々の門口に立って食を求め歩く修行。○歌姫院：娼妓のいる所。北夢瑣言（巻六）に、唐の裴休は、毳衲（毛織りの僧服）を着て歌姫院に托鉢して、欲情に染まず、人を濟度できるといった。○故与：五燈会元では、奪得（奪い得たり）○雲山：雲山の衣、雲水の衣で僧衣をいうか。行雲流水のごとくめぐり歩く行脚僧の衣。

【通釈】魯鈍なわたくしは、やはり、矢のように鋭い長老の禅鋒に射落とされました。「従って玉帯を当山へ寄進いたさればならぬわけですが、」いまのわたくしの衰弱しきったからだでは、玉帯に囲まれているのに耐えられなくなっています（ので喜んで布施いたします）。

ところで長老には、以前お召しになっていた雲山の衲裙を、わざわざわたくしにくださいましたのは、これを着て、娼妓のやかたへ托鉢に行かせようとなさるのでしよう。

蘇東坡 近藤光男より抄出



崔子忠 蘇軾留帶圖